



# 社会の時間と「時間の社会学」のこれから

梅村, 麦生

---

**(Citation)**

社会の時間 : 新たな「時間の社会学」の構築へ向けて:178-181

**(Issue Date)**

2022-06-30

**(Resource Type)**

research report

**(Version)**

Accepted Manuscript

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009427>



## おわりに 社会の時間と「時間の社会学」のこれから

現代の理論物理学者カルロ・ロヴェッリは、一般向けに書いたその著『時間の順序』のなかで、自身の提唱する「ループ量子重力理論」に基づく独自の時間論を展開したうえで、哲学的時間論への射程も含めて結論部で以下のように記している。人間が体感できるスケールをはるかに超える（あるいは、はるかに下回る）現代物理学による時間概念の更新を、アダムやアーリの言うように時間の社会学が受け入れることはできるのか、あるいはそもそも受け入れる必要があるのかどうかについては、本論集の「おわりに」に当たっても依然としてペンディングせざるを得ないが、以下の結論は時間の社会学にとっても示唆に富んでいる [Rovelli 2017: 164-167=2019: 191-193]。

現在わかっているもっとも根本的なレベルでは、わたしたちが経験する時間に似たものはほぼないといえる。「時間」という特別な変数はなく、過去と未来に差はなく、時空もない。それでも、この世界を記述する式を書くことはできる。……

すると驚いたことに、時間のお馴染みの性質が出現するにあたって、わたしたち自身が一役買っていた。この世界のごく小さな部分でしかない生き物の視点、つまりわたしたちの視点からは、この世界が時間のなかを流れるのが見える。この世界とわたしたちの相互作用は部分的で、そのためこの世界がぼやけて見える。このぼやけに、さらに量子の不確かさが加わる。そしてそこから生じる無知によって特殊な変数、つまり「熱時間」の存在が決まり、わたしたちの不確定性を量で表したエントロピーが定まる。……

日常生活でのわたしたちの動きは光と比べてひどく遅いので、複数の固有時間の差や時計の食い違いを感じることはなく、質量からの距離が違うことによって生じる時間経過の速度の違いも、小さすぎて判別できない。

だからけっきょくのところ、あり得るさまざまな時間ではなく、ただ一つの時間——自分たちが経験する、一様で順序づけられた普遍的な時間——について語る事が可能になる。これは、わたしたちの特殊な視点、エントロピーの増大を頼りとして時間の流れにしっかり根差したヒトとしての視点からの、こ

の世界の近似の近似なのだ。……

これが、わたしたちにとっての時間だ。時間は、さまざまな近似に由来する多様な性質を持つ、複雑で重層的な概念なのだ。

\*

さて話を時間の社会学に戻すと、「はじめに」に記しておいたように、とりわけ「社会の時間」と「社会学の時間」とのあいだには、ある緊張した関係がある。社会のあり方が変われば、その社会の時間のあり方も変わりうる。そしてその変化を追いかけるように、社会学の時間認識も変化しうる。しかし社会の変化を待たずとも、社会学の時間認識のあり方が変わっただけでも、その視点から見る社会の時間は違ったものとなりうる。現代における「時間の社会学」もまた、そうした現代社会とそこでの時間のあり方と、現代社会学の時間認識との関わりのなかで、彫琢されるべきものに他ならない。

したがって当然ながら、時間の社会学など存在しなくとも、日常生活のなかで社会に生きる人びとのもとにすでに時間は存在し、現に用いられている。何より時間の社会学もまた、そうした社会の営みのなかで築かれるものである。そうだとすると、社会のなかで日々現われている時間や、そこでの人びとによる時間の捉え方に、まずは取り組まなければならない。しかしそのことに取り組むにあたって、日常生活では盲点となっている部分を時間の社会学の視点を介して露わにすることで、社会の時間をもより良く説明できるということがありうる。

かつて哲学者ヨハネス・フォルケルトは、1925年に刊行した『時間の現象学と形而上学』のなかで、「こんにち誰もが時間の相対性について語っている」と言い、政治雑誌や休暇パンフレットまでもがアインシュタインの相対性理論を論じている、と記していた [Volkelt 1925: 64]。本論集第1章で取り上げた、いまなお参照される「時間の社会学」の古典的研究たちもその多分に漏れず、物理学における相対性理論のインパクトを陰に陽に受けて、社会的時間の相対性あるいは多元性を主題としていた。その流れは、デュルケームに見られる人類学的な他者や異文化の発見、あるいは近代社会における機能分化の発展とも即応している。

しかしソローキンとマートンの研究がまさにその反面として描き出しているように、近代社会においては天文学的時間（やがて原子時間も）に基づくクロック・タイムへの収斂も、同時に生じてきた。ウェーバーが見出した近代的企業家の時間規律も、マルクスやエンゲルスが描き出した賃労働における時間拘束も、一定の精度をもつ時計と暦によって初めて可能になる。あるいは社会史で言われるように、アメリカでの

大陸横断鉄道の開通や航空旅行の始まり、電信電話の普及に象徴される交通網や通信網の世界規模での発展は、特定の地点に拘束されない統一的な時間標準を要請した。

したがって本論集第1章にまとめられている通り、「時間の社会学」はいわば近代的時間に取り組んでいた当初より、「社会の時間」の多元性と統一性の双方にアプローチしていたと言える。しかし本論集第2部、第3部の各章で近代の時間概念や時間意識を批判的に検討するなかで明らかになったように、そうした社会の時間の多元性と統一性の並存は、近代的な時間概念のもとではともすれば覆い隠されがちであった。それに対して、第4部のとりわけ現代的と言える社会の諸領域に現われる時間現象において顕著に示されているように、現代社会に至るなかでこそ社会の時間の多元化と統一化の双方の傾向がより強く現われ、経験されるようになった、と言える。そうした変化をより良く見える可能性をもたらしているのが、第1部で取り上げた現代の諸理論である。

そして本論集以降に残されているのは、現代における「社会の時間」と「社会学の時間」の双方を規定している現代社会のあり方そのものへのまなざしと、そこでの時間のあり方に対する別の可能性の追究であるだろう。いずれにしても、現代における「社会の時間」を論じるに足る、現代の「時間の社会学」の視点を求めた本論集の試みと、それがそれぞれの論考を通してどこまで示すことができたのかについては、読者による判断を待つより他ない。

\*

最後に本論集は、科学研究費助成事業・基盤研究(C)「『時間の社会学』の現代的創成—公理論化と学説・応用研究を総合した社会的時間の解明」(研究代表者:高橋顕也、研究年度:2019~2021年度、課題番号:JP19K02145)の研究成果に基づく報告書である。

同科研プロジェクトは、研究代表者の高橋や本論集の編者らが中心となって2018年8月に立ち上げた「社会の時間」研究会を母体として、「時間の社会学」に関わる(1)理論・学説研究、(2)経験的応用研究、(3)公理論化研究の総合を目指して始められたもので、その成果の一部は第92回日本社会学会大会(東京女子大学、2019年10月5日)と、第93回日本社会学会大会(松山大学、オンライン開催、2020年10月31日)の2回にわたって高橋がコーディネーターを務めて実施されたテーマセッション「『時間の社会学』の現代的展開」(I・II)で報告されるとともに、神戸大学社会学研究会『社会学雑誌』第37号「特集2『時間の社会学』の現代的展開」(2020年8月31日刊行)によって公刊されている。

なお、本論集の刊行にあたっては、同科研プロジェクトに加えて、同じく高橋が研究代表者を務める、科学研究費助成事業・基盤研究研究(C)「社会学的時間批判—公理論化と学説・応用研究の総合による現代的時間現象の批判的研究」(研究代表者:高橋 顕也、研究年度:2022~2024 年度、課題番号:JP22K01917)による助成を受けている。

#### 文献

Rovelli, C. [2017] *L'ordine del tempo*, Milano: Adelphi. (富永星訳『時間は存在しない』NHK 出版, 2019 年.)

Volkelt, J. [1925] *Phänomenologie und Metaphysik der Zeit*, München: C.H. Beck